

令和 2 年 6 月 15 日現在

機関番号：34517

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2016～2019

課題番号：16K02748

研究課題名(和文) 日本語の認識的モダリティ形式の多義性に関する研究

研究課題名(英文) Semantic Extensions of Japanese Epistemic Modality Forms

研究代表者

木下 りか (Kishita, Rika)

武庫川女子大学・文学部・教授

研究者番号：50314026

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,100,000円

研究成果の概要(和文)：認識的モダリティ形式は、真偽不定の内容についての認識の仕方を表す用法と、真であると認識している事態を不確かなものとして述べる発話の仕方を表す用法とを持ち、多義的である。この意味拡張の動機は、これらの形式が示す内容を概念化する主体の客体的把握にあると考えられる。意味拡張の際、認識の用法において各形式が示す命題の真偽の捉え方は、情報の妥当性に関する捉え方として、発話の用法に写像される。

研究成果の学術的意義や社会的意義

日本語の認識的モダリティ形式の多義性に関する研究は、これまで一部の形式について限定的に行われることはあっても、体系的にはなされてこなかった。本研究はこの課題に取り組んだものである。認識の仕方表す認識的モダリティとしての体系的記述を踏まえ、発話の仕方表す用法についても記述を行い、その意味拡張の動機について考察を行った。この記述は、英語法助動詞など他言語との対照研究の基盤となり、言語の普遍性や個別性を捉える研究に貢献できる可能性がある。

研究成果の概要(英文)： Epistemic modality forms are polysemous words that not only express the judgment as to whether a proposition is true or false, but also describe the way of presenting information. The motivation for this semantic extension is the objectification of the subjects involved in the contents represented in these forms. When the contents of these forms express the truth of proposition, the conceptualizers who make the judgment are construed subjectively. On the other hand, when they describe information in discourse, the conceptualizers are construed objectively to be considered as an independent entity from the speaker.

In this semantic extension, properties of each form as epistemic modality are mapping into those of the usage expressing the way to present information.

研究分野：意味論 文法論

キーワード：多義性 意味拡張 話者 概念化者 客体化 メタファー

1 研究開始当初の背景

認識的モダリティ形式(だろう、かもしれない、にちがいない、ようだ、らしい、はずだ)は多義性を持つ。次の例(1)における「かもしれない」は真偽不定の事柄について述べており、非現実世界についての認識の仕方を表す認識的モダリティ(認識の用法)である。これに対し、例(2)と例(3)は話者にとって真偽の確定した内容について述べている。例(2)は相手の発話を是認する表現、例(3)は聞き手への配慮を含ませた表現で、いずれも発話の仕方を表す用法である。

(1) (よくわからないが) あの人大学の教員かもしれない。[認識]

(2) (「あの人」が大学教員であることが確かな場合に)

あの人大学の教員かもしれないが、教養がない。[発話]

(3) (ケーキを食べて) おいしいかも! [発話]

このように、認識的モダリティ形式は、認識の用法と発話の用法を持ち、多義的である。

認識的モダリティ形式の多義的意味のうち、従来の研究においては、もっぱら認識の用法に関心が寄せられ、発話の用法に関する考察は限定的であった。また、複数の形式を視野に入れ、その意味拡張の動機について考察するという課題は、注目されていない。一方で、多義性に関する理論的な研究や、多義語に関する記述研究そのものは、進展を見せている。また、日本語の認識的モダリティ形式と類似した意味を持つ英語法助動詞については、多義性に関する研究が蓄積されている。以上のように、日本語の認識的モダリティ形式の多義性に関する取り組みを行う上で、一定の基盤が整っているとと言える。

2. 研究の目的

本研究の目的は、認識の仕方を表す用法と発話の仕方を表す用法という、複数の意味を持つ認識的モダリティ形式の多義的意味を記述することにある。記述に際しては、まず、各形式の認識的モダリティとしての意味(認識の用法)と発話の用法、それぞれの特徴を記述し、その用法間の関係と意味拡張の動機に関する考察を行う。その上で、それぞれの形式を超えて共通して観察される、意味拡張の動機について考える。

3. 研究の方法

認識的モダリティ形式の多義的な意味のうち、認識的モダリティとしての意味(認識の用法)については、木下(2013)における体系的記述を参照する。発話の仕方に関する用法については、BCCWJ(現代日本語書き言葉均衡コーパス)などコーパスから用例を採取し、記述を行う。

その上で、各形式の意味拡張の動機について考察を行う。その際、主な視点となるのは、1) 認識の用法に関する体系的記述の枠組みとなる、推論の諸特徴(帰結の特徴や推論の型など)が、発話の用法と関連性を持ち得るか、2) 英語法助動詞の示す多義的な意味拡張の動機の中に、日本語の記述に援用可能なものがあるか、という点である。

4. 研究成果

(1) 認識的モダリティ形式(かもしれないなど)の多義的な意味拡張は、述べる内容を概念化する主体の、客体的把握を動機とすると考えられる。命題の真偽について述べる認識の用法において、その内容を概念化する主体は、主体的に把握されており(Langacker 2006 など)、話者は自らの認識世界だけを見てその内容について述べる。これに対し、発話の仕方について述べる用法の場合、その情報を概念化する主体は、話者から切り離され、話者は情報の内容だけではなく持ち主をも俯瞰し、述べることになる。これにより、話者は自身が真であると認識する内容について

も、不確かで妥当性に欠ける事柄として述べることができる。このとき、認識的モダリティ形式を用いて述べられる内容は、真偽に関する命題ではなく、妥当性判断の対象となる情報となる。つまり、認識の用法における話者は、認識者である自己については主体的に把握し、その認識内容の真偽について述べるのに対し、発話の用法における話者は、情報（ある主体によって把握されている事態）を俯瞰する視点から、その妥当性に関して述べる。

「かもしれない」の比較的新しい用法として、例(3)のように自身の感情や感覚について述べる用法がある。日本語において、自身の感覚は直接把握可能なものとされ、確言形で述べられるのが通常である。しかし、例(3)のように、「かもしれない」を用いて述べることができるのは、感覚主が客体化され、話者から切り離された存在として把握されているからだと考えられる。他の認識的モダリティ形式も同様の意味拡張を起し、情報の縄張り内にある知識など(神尾 1990, 2002)、本来は確言可能な内容について述べることができる。

(2)認識の用法から発話の仕方を表す用法へ意味が拡張する際、各形式が認識的モダリティ（認識の用法）として示す特徴は、発話の用法の特徴に写像される。つまり、認識の用法を記述する上で有効な視点となる推論の諸特徴、すなわち、根拠や帰結の特徴、両者をつなぐ推論の型などは、情報の妥当性に関する特徴として把握しなおされ、情報が妥当性だと言える理由や前提、妥当性のあり方、妥当性判断の仕方などとして、この用法を表す各形式の記述に貢献する。

たとえば、「かもしれない」を用いて自身の感情について述べる「(私) うれしいかも！」のような発話の用法は、聞き手への配慮、共感の志向、照れなどを表す機能を担う。感情主である自己は「うれしい」という自身の感情を真であると捉える一方で、その感情主を相対化し、「うれしくない」という情報が妥当である可能性を承認する。この可能性の承認という特徴は、認識の用法を表す「かもしれない」が、命題が真である可能性について述べることと、可能性の分散に言及するという点で共通する。その他の形式の発話の用法についても同様に、認識の用法と共通した特徴が見られ、婉曲や正当性の主張、確認要求などの機能を担う。このメタファー的な意味拡張において写像されるのは、英語法助動詞における力と障害物 (Sweetser 1990) とは異なり、事態を把握するための推論の仕方であると考えられる。

<引用文献>

神尾 昭雄 (1990) 『情報のなわ張り理論—言語の機能的分析』大修館書店

神尾 昭雄 (2002) 『続・情報のなわ張り理論』大修館書店

木下りか(2013) 『認識的モダリティと推論』ひつじ書房

Langacker, Ronald W. (2006) Subjectification, Grammaticization, and Conceptual Archetypes. In: Angeliki Athanasiadou, Costas Canakis, and Bert Cornillie (eds.), *Subjectification: Various Paths to Subjectivity*. Mouton de Gruyter, pp.17-40.

Sweetser, Eve E. (1990) *From Etymology to Pragmatics: Metaphorical and Cultural Aspects of Semantic Structure*. Cambridge University Press.

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計3件（うち査読付論文 3件／うち国際共著 0件／うちオープンアクセス 0件）

1. 著者名 木下りか	4. 巻 106
2. 論文標題 文学テキストと認知的モダリティ形式 形式の選択と使用から見えるもの	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 表現研究	6. 最初と最後の頁 17-27
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 木下りか	4. 巻 16
2. 論文標題 認知的モダリティ形式の多義性と認知領域 「認識」から「是認」への意味拡張	5. 発行年 2016年
3. 雑誌名 日本認知言語学会論文集	6. 最初と最後の頁 524 - 529
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 木下りか	4. 巻 36
2. 論文標題 引用節を伴う思考動詞の多義性をめぐって 思考主体の役割と意味拡張	5. 発行年 2016年
3. 雑誌名 K L S	6. 最初と最後の頁 25 - 36
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計10件（うち招待講演 1件／うち国際学会 5件）

1. 発表者名 木下りか
2. 発表標題 Meaning and Function of Deontic Modality "BEKI"
3. 学会等名 International Conference of Japanese Language Education in Malaysia (国際学会)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 木下りか
2. 発表標題 価値判断のモダリティ「べき」の命題内容条件 可能形式を中心に
3. 学会等名 ICJLE (国際学会)
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 木下りか
2. 発表標題 文学テキストと認知的モダリティ形式 形式の選択と使用から見えるもの
3. 学会等名 表現学会全国大会 (招待講演)
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 木下りか
2. 発表標題 「かもしれない」の意味拡張と主体の役割 「認識」から「表出的用法」へ
3. 学会等名 第168回現代日本語学研究会
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 木下りか
2. 発表標題 Polysemous Usages of hazuda in the English Translation
3. 学会等名 International Conference of Japanese Language Education in Malaysia (国際学会)
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 木下りか
2. 発表標題 The polysemy of hazuda in Japanese
3. 学会等名 ICJLE (国際学会)
4. 発表年 2016年

1. 発表者名 木下りか
2. 発表標題 「かもしれない」の新たな用法と間主観性
3. 学会等名 国際日本語教育・日本研究シンポジウム (国際学会)
4. 発表年 2016年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
--	---------------------------	-----------------------	----